群教セ	I01 － 04
	平27.257集
	特－知的障害

知的障害特別支援学校における集団の中で活動を楽しむ児童の育成

――生活単元学習での「支援の振り返りシート」を活用したできる状況づくりを通して――

特別研修員　岩﨑　千佳

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

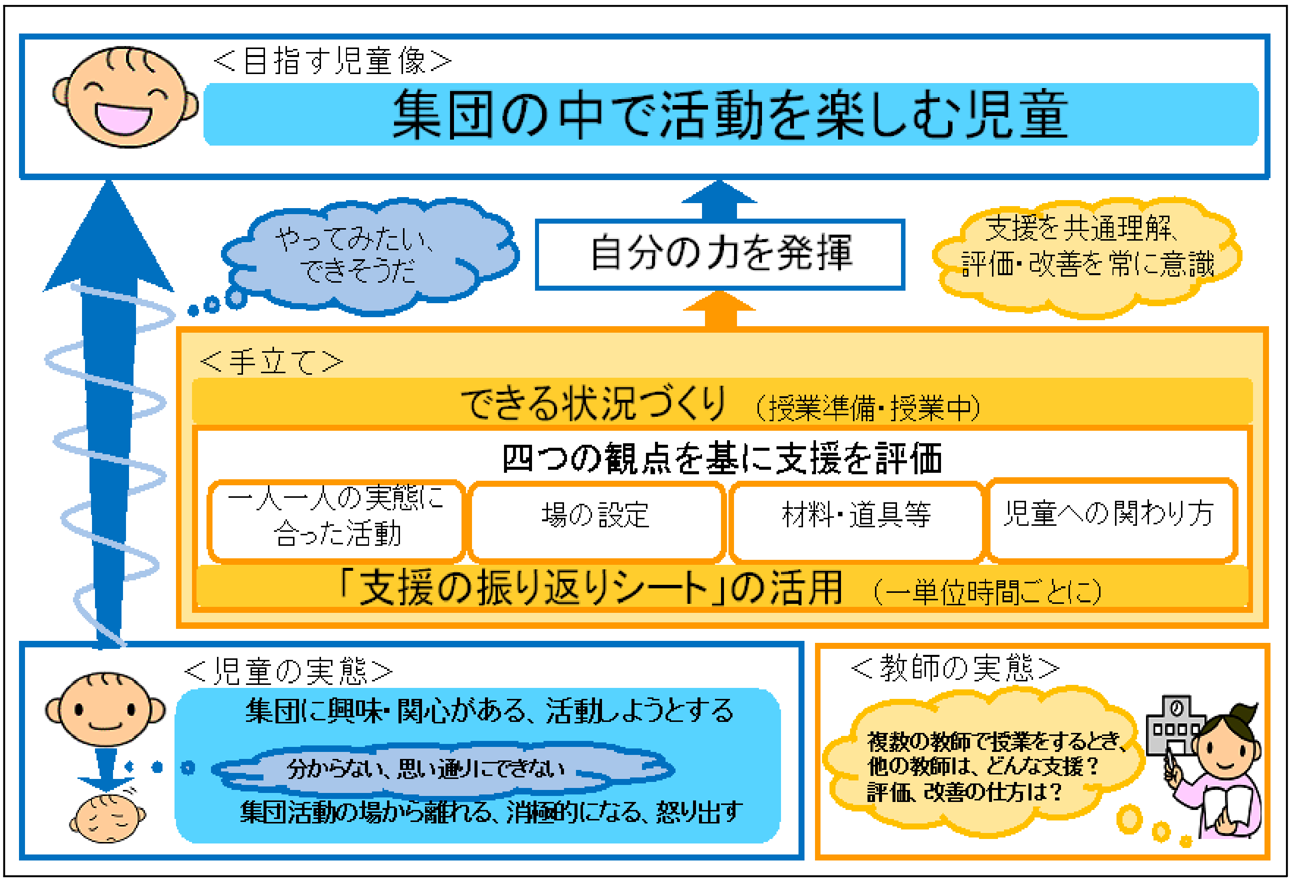
第２期群馬県教育振興基本計画の基本目標は「たくましく生きる力をはぐくむ」であり、本校の今年度の指導の重点の一つは「豊かに生きる素地を養う指導の充実」である。たくましく、豊かに生きるためには、集団の中で、自分の力を発揮し、活動を楽しむ主体的な態度が必要であると考える。

本研究の対象は、知的障害と自閉症スペクトラム障害等を併せ有する小学部１年の児童である。個人差はあるが、集団の前に出て号令をかけたり、初めての活動でも教師の説明や手本を手がかりにして活動したりする姿が見られる。しかし、集団活動に戸惑い、消極的になったり、活動に見通しが持てなくて、その場から離れたりすることがある。また、思い通りにできないと、受動的になったり、怒り出したりすることもある。このような児童が、集団の中で活動を楽しむためには、児童が「やってみたい」「できそうだ」と思えるできる状況をつくることが大切である。そのためには、教師の支援を評価し改善していく必要がある。

そこで、本研究では、児童の生活経験の中から興味・関心のある活動を取り入れた生活単元学習において、「支援の振り返りシート」を活用したできる状況づくりをすることにより、学級や学年の集団の中で自分の力を発揮し、活動を楽しむ児童の育成を図りたいと考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

(1)「支援の振り返りシート」

一単位時間ごとに複数の教師で「支援の振り返りシート」を活用して、本時の支援を評価し次時の支援について考え、共通理解を図る（図１）。その際、四つの観点（「一人一人の実態に合った活動の工夫」「場の設定の工夫」「材料・道具等の工夫」「児童への関わり方の工夫」）を基に、支援を評価する。支援の経過や児童の変容等が分かるように、見やすい一覧表の様式にして、一単元一枚にする。また、全児童について、個別の目標、支援の評価、考察、次時の支援を記録する。複数の教師による支援の評価等は、児童一人当たり５分程度を目安に行う。

支援の振り返りシート

		児童Ａ				児童Ｂ
個別の目標						
第１時	支援の評価 (◎･○･△)	活動	場	道具等	関わり	
	考　察					
	次時の支援					
第２時	支援の評価 (◎･○･△)	活動	場	道具等	関わり	
	考　察					
	次時の支援					
個別の目標の評価						

図１　「支援の振り返りシート」の一部

(2)「支援の振り返りシート」を活用したできる状況づくり

児童が自分の力を発揮し、集団の中で活動を楽しむことができるように、一単位時間ごとに「支援の振り返りシート」を活用して、以下の四つの観点を基に支援を評価し、できる状況づくりを行う。また、授業準備だけでなく、授業中も児童と共に活動しながら、四つの観点を基に支援を評価し、可能な範囲でその場で改善していく。

①一人一人の実態に合った活動の工夫

児童一人一人の興味・関心に応え、児童にとって魅力的な活動を用意する。

②場の設定の工夫

児童がテーマを意識しやすく、教師や友達と共に取り組みやすい場を設定する。

③材料・道具等の工夫

児童の興味・関心に応える材料や、手の大きさや力加減に合った扱いやすい道具等を用意する。

④児童への関わり方の工夫

児童が楽しんでいる活動に共に取り組み、活動が広がるように誘ったり、部分的に支援したり、材料を複数提示したりする。また、児童が友達と関わることができるように言葉をかける。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　「支援の振り返りシート」を活用し、四つの観点を基に評価したことで、話合いが焦点化し、立場や経験の異なる教師同士でも考えを出しやすくなり、一人一人の実態に合ったできる状況をつくることができた。児童は、集団活動の中で進んで活動したり、学級や学年の友達と関わるようになったりした。

○　「支援の振り返りシート」に端的に表記したことにより、支援の経過や児童の変容等が整理されて捉えやすくなり、支援の共通理解や再確認が容易になった。児童は、多くの教師から、気持ちに寄り添った支援を受けることができたので、学級や学年の集団の中で、笑顔で活動を続けることが増えてきた。

○　一単位時間ごとに「支援の振り返りシート」を活用したことで、支援を評価し改善し、できる状況をつくろうとする教師の意識が高まり、できる状況づくりが進んだ。自分の力を発揮することができた児童からは、満足そうな姿を見ることができた。

２　課題

○　ある児童に対するできる状況づくりが、他の児童にとって戸惑う原因になる場合があった。集団活動の中で、児童一人一人に対するできる状況づくりを、どのように調整するかが課題である。

○　「支援の振り返りシート」の四つの観点は、単元により軽重を付けて評価すると、より活用しやすくなり、できる状況を効果的につくることができると考える。

＜授業実践＞

実践１

１　**単元名**　　「バスのみちをいっぱいにしよう」（第１学年・１学期）

２　本単元及び本時について

本単元は、学級集団で行う製作活動と遊びを取り入れた単元である。児童が、毎日スクールバスで通学し、窓からの景色をよく見ていることや、製作活動を好み、絵を描いたり、はさみで切ったりすることに興味・関心があることから、本テーマ「バスのみちをいっぱいにしよう」を設定した。本テーマは、積み木が好きな児童はビル街を作ったり、動物の絵を描くことが好きな児童は動物園を作ったりする等、一人一人の実態に合った活動が展開できるとともに、新たな材料に興味を持つことも期待できるので、児童が進んで活動を楽しむことができると考えた。本時は全８時間計画の２時間目であり、ねらいは、「自分なりにテーマをつかみ、教師や友達と同じ場で絵に描いたり、作ったりすることができる」である。

３　授業の実際

(1)「支援の振り返りシート」（第１時）

授業が終わった後、３名の教師で「支援の振り返りシート」を活用し、児童の活動の様子から支援を評価し、次時の支援を考え、共通理解を図った(図２)。

支援の振り返りシート

		児童A				児童B				児童C				児童D			
個別の単元の目標		道の外に装飾した箱などを並べたり、教師の仲介を受けて友達の作品を楽しんだりすることができる。				作る物や材料を指さしで選んだり、自分でできない時に教師に手助けを求めたりして、製作活動を進めることができる。				教師や友達と模造紙を共有して、繰り返し描いたり作ったりすることができる。				困ったら教師に手助けを求めて作りたい物を作り、教師や友達に作った物を紹介することができる。			
第１時 6/12 (金) ３校時	支援の評価 (◎・○・△)	活動 ◎	場 ◎	道具等 ○	関わり ○	活動 ◎	場 ○	道具等 △	関わり ○	活動 ◎	場 ◎	道具等 ○	関わり ◎	活動 ○	場 ◎	道具等 ◎	関わり ○
	考察	・バスを作る場面で、クレヨンを並べていたのは、隣に並んでいるクレヨンを見たら、製作よりも並べることへの意欲が勝ったからだろう。・模造紙の端を、道と捉えている。				・バスを作る場面で、手助けを求め、手添えを受けてはさみで切ったり、貼付けをしたりできた。・より扱いやすく切れるはさみがあれば、達成感を味わうことができるだろう。				・バスを選んで作り、窓に乗客を描くことをしたのは、魅力ある活動だったからだろう。・友達と関わりバスを走らせたのは、場が適切だったからだろう。				・バス作りは意欲的だった。制作を始めたら、怒り出したのは、間違いを指摘されたと思ったからだろう。・「楽しい、すごい」と言い、バスを走らせていたので場は適切。			
	次時の支援	クレヨンで描く活動に取り組む場面では、１本ずつ渡すようにする。はさみは、手を添えて正しく持つようにした後、見守る。				軽い力で切ることができるはさみを準備する。模造紙の道にバスを走らせる時は、転倒に気を付け、支える。				・のりの使い方を視覚化と「さかさ、ぴゅー、ぺたん」の合い言葉で提示。・[illegible]への戸惑いを想定し、タオルを携帯。				・初めに困ったら助けを求めるよう助言し、活動中も少し見守るようにする。・自分から求めることができたら、褒める。			

図２　「支援の振り返りシート」（第１時）

(2)「支援の振り返りシート」を活用したできる状況づくり

①一人一人の実態に合った活動の工夫

模造紙に描かれた道に前時に空き箱で作ったバスを走らせる活動や、積み木を並べてビル街を作ったり、用意した絵や自分で描いた絵を空き箱や空き容器に貼り建物を作ったりする活動など、一人一人の興味・関心に応える魅力的な活動を用意した。

バスを持った児童は、進んで活動場所に移動し、笑顔でバスを走らせた（図３）。また、進んで空き箱で学校を作ったり、画用紙に動物を描いたりもしていた。

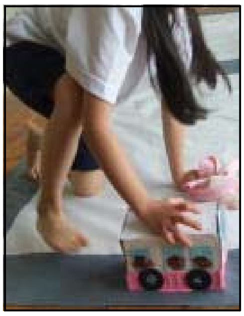


図３　バスを走らせる児童

図４　ビデオカメラ付きバス

②場の設定の工夫

児童が、自分なりにテーマをつかむことができるように、登下校のスクールバスから見える風景の映像や、図４のようなビデオカメラを付けたバスから見える模造紙上のライブ映像を大型テレビに映して提示したところ、児童は、店の名を言ったり、驚いた表情をしたりしながらよく観ていた。

また、児童が、教師や友達と同じ空間を共有しながら、製作活動を楽しむことができるように、次頁の図５のような教室の床のほぼ全面に敷いた模造紙の上に製作する場を設定し、活動に十分な広さを確保したり、道具等の置き場所を工夫したりした。すると、児童は、友達と交わって道にバスを走らせたり、活動の場で集中して作りたい物を作ったりしていた。

③材料・道具等の工夫

児童が作りたい物を想定して、イラストや空き箱などの材料を用意したところ、児童は気に入った材料を選んで作り始めた。

また、材料を取りに行くときに、児童同士の関わりが生まれるように、材料は、床に敷いた模造紙の外、左右の座卓に等分して置いた。使いたい紙が手近に無くなった児童が、「紙、ください」と教師に要求したので、一緒に材料を取りに行ったところ、友達が作った塔に気付き、手を伸ばして触った。

さらに、前時の支援の評価から、図６のような軽い力で切れるはさみや、図７のようなのりの使い方を視覚化したカードを用意したところ、児童は、自力ではさみやのりを使えるようになった。

図５　空間を共有できる場の工夫

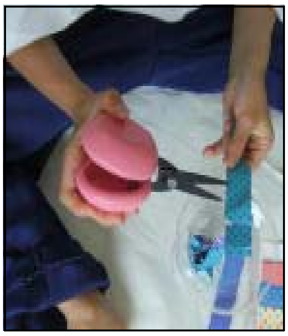


図６　軽い力で切れるはさみ

図７　のりの使い方カード

④児童への関わり方の工夫

児童が積み木を横に並べる活動に満足した様子が感じられたので、活動が広がるように、教師が積み木を上に積んで誘うようにした。また、前時、手順の助言で怒り出した児童には、支援の評価に基づいたできる状況づくりとして、本時は、困ったら助けを求めるよう助言し、活動を少し見守るようにした。すると、児童は落ち着いて活動し自ら「教えて」と言い、助けを求めることもできた。

４　考察

一人一人の実態に合った活動の工夫については、児童が笑顔でバスを走らせたり、進んで作ったり、描いたりしていた様子から、教室の床のほぼ全面に敷いた模造紙の上でバスを走らせる活動や製作する活動は魅力的で、児童の実態に合っていたと考える。

場の設定の工夫については、児童が友達と交わって模造紙上の道にバスを走らせたり、進んで作った物を道に沿って並べたりしていた。模造紙上の活動の場やビデオカメラ等を活用してテーマをつかむ場は、テーマを意識したり、共に活動したりしやすくなっていたと考える。

材料・道具等の工夫については、「支援の振り返りシート」を活用して考え用意した軽い力で切れるはさみや、のりの使い方を視覚化したカードによって、児童は、自力ではさみやのりを使えるようになった。約２㎝幅の短冊を選び、はさみでたくさん切って、透明容器に入れてジュースを作っていた児童の様子から、自分でできる喜びと活動意欲の高まりがうかがえた。

児童への関わり方の工夫については、前時において、手順の助言で怒り出した児童に対して、「支援の振り返りシート」を活用し、困ったら助けを求めるよう助言しておき、活動を少し見守るように共通理解を図り支援を行った。本時の児童の様子から、関わり方は適切だったと考える。

このように、児童が、活動の場から離れず集中して活動し続けていた様子から、「支援の振り返りシート」を活用し、四つの観点を基に本時の支援を評価して考えた次時の支援は有効だったと考える。また、児童と一緒に活動しながら授業中に支援を評価し、可能な範囲でその場で改善することも、できる状況づくりで必要であると考える。そして、四つの観点を基に、支援を評価したことは、話合いを焦点化させ、立場や経験の異なる教師同士でも考えを出しやすくし、できる状況を支えるより適切な支援を考える上で役立った。「支援の振り返りシート」の活用は、今回で２回目だった。児童一人当たり10分弱かかった。評価を継続的に行ったり、改善の時間を確保したりするため、徐々に短時間で行えるようにしたい。

実践２

１　単元名　　「おまつりをしよう」（第１学年・２学期）

２　本単元及び本時について

本単元は、３クラス合同の学年集団で行う遊び単元である。１学期に学級集団で行った単元で、学級の教師や友達との関わりの中で主体的に活動した経験を、本単元において発展させたいと考えた。本テーマ「おまつりをしよう」は、児童が、作って遊ぶことや初期のごっこ遊びに興味・関心があることから思いをくみ取り設定した。本テーマでは、屋台ごっこや御輿パレードなど児童が学年の教師や友達と無理なく空間を共にしたり、関わったりする場を設定できる。また、屋台遊びの準備や屋台ごっこ、御輿パレードなど児童一人一人が興味を持てる多様な活動も展開でき、活動に変化のある単元を構成することで、児童が進んで活動を楽しむこともできると考える。本時は全５時間計画の５時間目であり、ねらいは、「学年の教師や友達と活動の場を共にしたり、関わったりして、祭りごっこを楽しむことができる」である。

３　授業の実際

⑴「支援の振り返りシート」（第３・４時）

学級単位で「支援の振り返りシート」を活用して支援の評価を行ったが、次時の支援を朝の学年打合せで報告したり、「支援の振り返りシート」を職員室の所定の場所に置いたりして、学級間の共通理解も図った。評価を継続的に行ったり、改善の時間を確保したりできるように、シートへの記入は、端的に表記したり、支援を継続する場合は空欄にしたりするようにした（図８）。

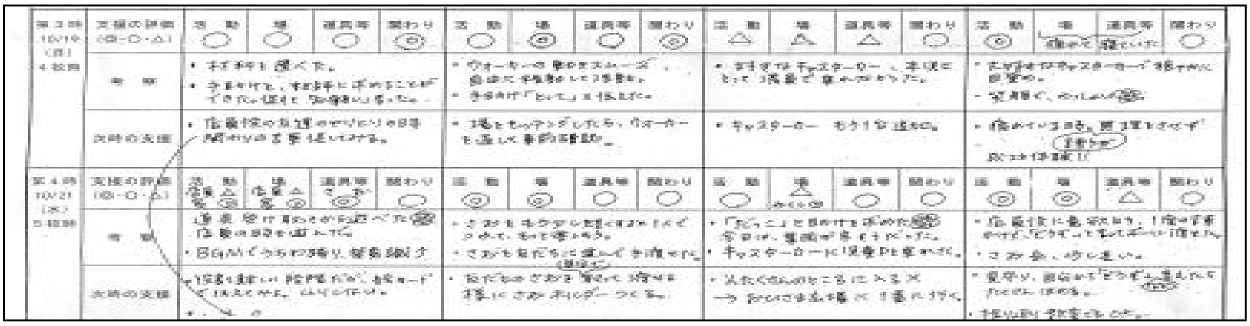


図８　「支援の振り返りシート」（第３・４時）

⑵「支援の振り返りシート」を活用したできる状況づくり

①一人一人の実態に合った活動の工夫

児童の興味・関心に応え、児童がやってみたいと思える魅力的な活動として、店員と客に分かれて行う屋台ごっこ、キャスターカーに乗るなどして廊下を練り歩く御輿パレードを用意した。また、それぞれの活動に選択肢を用意して、児童がやりたい店員や遊びたい屋台、鳴らしたい楽器や乗りたいキャスターカーなどを選べるようにした。

このように、一人一人の実態に合った活動を用意したところ、はっぴを着た店員役の児童は、進んで店員をする屋台に移動し、やりたい仕事の配置についた。チケットを持った客役の児童は、遊びたい屋台で、繰り返しボウリングや魚釣りをしていた。

②場の設定の工夫

児童が学年の教師や友達と無理なく同じ空間を共にしたり、物や言葉を介して関わったりすることができるように、屋台ごっこや御輿パレードの場を設定した。図９のようなボウリング屋台では、前時の支援の評価から、傾斜台からボールを転がす場と拾う場を区切って客と店員の役割分担を明確にして、ボールの受け渡

図９　ボウリング屋台の場の工夫

しなどの関わりが生まれるように工夫した。傾斜台にはスタートゲートやボール置きを付ける工夫も行った。このように場の設定を工夫したところ、児童は、チケットやボール、さおの受け渡しをしたり、「いらっしゃい」「お願い」などを身振りや言葉で伝えたりして関わっていた。御輿パレードのキャスターカーの中では、体に触れられることがやや苦手な児童が友達が触れることを受け入れていた。

③材料・道具等の工夫

魚釣り屋台では、どの児童も魚を釣って楽しむことができるように、空き缶を魚の材料にしたり、児童一人一人に合わせてさおの長さや太さを調節したりしたところ、児童は一人でさおを操作し、魚を釣ることができるようになった。

また、前時の支援の評価から、店員役の児童が、友達のさおを自分で選び取って手渡すことができるよう、児童の顔写真を貼ったさおフォルダーを作った（図10）。このように、道具を工夫したところ、店員役の児童は、客役の友達を見てさおを選び取り手渡すことが、自分の判断でできた。客役の友達が教師と「ありがとう」を言うと、嬉しそうに微笑んで、次の客を迎えようとした。

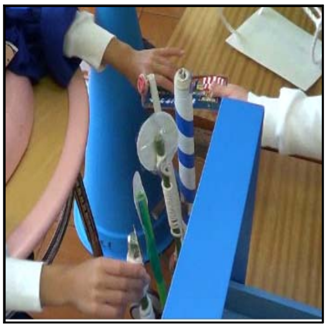


**図10　顔写真付き
さおフォルダー**

④児童への関わり方の工夫

児童が楽しんでいる活動に共に取り組みながら、遊んだり、物を受け渡したりする場面で、児童同士の関わりを促すようにした。ボウリング屋台では、前時の支援の評価から、教師が店員役の児童に、ボール置きの補助台を必要とする客役の児童に届けるように促したところ、教師の依頼をきっかけに、店員役と客役の二人の児童は、顔を見合ってボールの受け渡しをしたり、客役の児童が求めたタッチに店員役の児童が応えたりするなど、児童同士が関わる姿が見られた。御輿パレードでは、児童が指さしで「あの子と一緒にキャスターカーに乗りたい」という気持ちを教師に伝えてきたので、相手児童に仲介して伝えたところ、相手児童が友達の気持ちに応えてキャスターカーに乗った。二人の児童は、互いに嬉しそうな笑顔を見せた（図11）。

**図11　指さしで伝えた
気持ちを仲介**

４　考察

屋台ごっこと御輿パレードでは、児童が興味・関心を持った活動を選び、進んで活動したり繰り返し取り組んだりしていた。これらの様子から、児童がやってみたいと思える一人一人の実態に合った活動を用意できたと考える。

多くの児童が学年の教師や友達と屋台ごっこや御輿パレードの場を無理なく共にできたり、ボウリング屋台や魚釣り屋台等で学年の教師や友達との関わりが生じたりしたのは、「支援の振り返りシート」を活用し、複数の教師で場の設定を工夫しできる状況づくりを行ったことによると考える。

材料・道具等の工夫について、児童が一人で魚を釣ったり自分の判断でさおを手渡したりすることができるようになったのは、「支援の振り返りシート」を活用して、扱いやすいさおや児童の顔写真を貼ったさおフォルダーを用意したことにより、自分の力を発揮することができたからであると考える。

授業中に児童の気持ちを仲介し相手児童に伝える等、前時の支援の評価だけでなく、積極的に授業中の支援も評価したことは、児童同士の関わりを促すために有効であったと考える。

このように、一単位時間ごとに「支援の振り返りシート」を活用し、複数の教師で四つの観点を基に授業準備や授業中にできる状況づくりを行ったことで、児童は、進んで活動したり友達と関わるようになったりした。「支援の振り返りシート」の活用は今回で２単元目だったが、端的に記入したり、支援を継続する場合は空欄にしたりしたところ、児童一人当たり２～３分で行えるようになった。そのため、評価を継続的に行ったり、改善の時間を確保したりすることができた。また、学年集団で行う単元で、学級単位で支援の評価を行う場合、次時の支援を学級間で調整する必要があった。